表紙モノ語り

高野山のしゃもじ

地域：日本　和歌山県　1975年受入
標本番号：H0014229

中牧弘允（なかまき ひろちか）
民博　民族文化研究部
専攻は宗教人類学、経営人類学。日本の宗教を国内外で追い求めてきたが、高野山では会社供養塔の研究に従事したことがある。

しゃもじはご飯をすくう食事の道具である。しゃくしともいうが、地方によって呼び方は異なり、その区別は曖昧である。

渋沢敬三のアチック・ミューゼアムの収集品に高野山の「朱塗杓文字」がある。一九二七（昭和二）年に高野山から深井五郎が渋沢宛に郵送していることがわかる貴重な資料である。三銭の切手を貼り、そのまま投函している。また、その状態で保管しているのも、情報としてはおもしろい。

高野山の宿坊に泊まると、いまでもしゃもじがお土産として提供される。朱塗りの贅沢品ではなく、白木のつましいものではあるが。

高野山としゃもじの関係を解くカギは安芸の宮島にある。宮島のしゃもじは木製では全国七〇パーセントのシェアを占めるといわれている。お土産としても紅葉饅頭とならぶ人気をほこっている。

宮島のしゃもじは寛政のころ、修行僧が弁天の琵琶に形が似ているところから、厳島神社の参拝記念につくるよう島民にすすめたと伝えられている。それは、祭神である三柱の女神のうち、市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）が弁天とみなされていることにも由来する。

しゃもじは主婦権の象徴だけでなく、古来、霊力のある呪物や縁起物として特別扱いされてきた。米とつながる五穀豊穣や商売繁盛、飯取る＝召取るから派生した必勝祈願、すくうから生じた救済機能など、意外と多様性に富む。戸口にさして魔よけとしたり、自在かぎに結んで火伏せとしたりもした。また遊客を招いたり、魂を呼び戻したりする習俗もあった。新宗教の大本では御手代（みてしろ）として出口王仁三郎（おにさぶろう）の手の代役をつとめたこともある。高野山のしゃもじも日用品であると同時に、霊力のやどった呪物にほかならないのである。